

札幌市環境プラザ運営協議会 平成28年度第2回実施概要

- 1 日時 平成28年11月28日(月)19:00~21:00
- 2 会場 札幌エルプラザ公共4施設2階 会議室3・4
- 3 出席者
 - (1)委員:伊井委員、鎌田委員、河西委員、小林委員、高橋委員、山本委員、早坂委員、寺田委員
 - (2)札幌市:環境局環境計画課 環境教育担当係長、計画係担当
 - (3)事務局:(公財)さっぽろ青少年女性活動協会 市民参画課長、環境係長、主任指導員、指導員、サポートスタッフ

4 会議次第

- (1)開会
- (2)札幌エルプラザ公共4施設館長 あいさつ
- (3)委員近況報告
- (4)議事
 - ・平成28年度報告(中間)
 - ・展示物更新について
- (5)札幌市環境局 あいさつ
- (6)閉会

5 議事概要(Q:質問 A:回答 O:ご意見)

(1)平成28年度事業報告(中間):事務局より 平成28年度事業の報告を行った。

- 環境プラザの事業イメージ、利用者数と連携団体の推移
- 施設利用状況
- ア 環境情報の収集・提供業務
- イ 環境保全活動、交流の支援と推進業務

企業と学校をつなぐことについて

- Q 環境教育リーダー派遣制度の課題で、NPOなどが学校に出向くという新しい形について説明してほしい
- A 学校やさまざまな場所で環境活動を支援していく上で、環境教育リーダー派遣制度をそのまま成長させる方法と、NPOや環境活動団体から学校などへのアプローチを支援する方法が考えられる。学校とNPO等の橋渡しを環境プラザの役割として検討しているが、環境活動団体が学校などに出向く際には、予算的な問題がある。学校の立場や企業協賛の可能性について、ご意見をいただきたい。
- 企業側としても、自社の事業に対してどう親和性があるかというもあり、当社も環境教育をどのように進めるかの基本的な考え方を確立している。環境教育リーダー派遣制度を企業にどう結びつけていくのかという視点では、何かテーマ性を持った派遣業

務など、見えやすい形でなければ難しいのではないか。環境の中でも例えば、「水」「山」「動物」等のテーマを持って、そこに興味を持っている企業とのパイプを普段からつないでおくことが重要と考える。

- 学校は、それぞれ独自のカリキュラムを持っており、いずれは学校の実態に応じた独自のつながりを構築しなければいけないという課題がある。環境教育リーダー派遣制度についても、あくまで入口であり、教育課程の編成権は学校毎にあるので、今後学校がそれを独自に開拓していけるような道筋をつけたり、まずは経験する場を持ってもらったりするという考え方ではどうか。一定程度の調整の後は、学校にお任せし、それを踏まえたうえでリーダーさんに取り組んでいただく。そうすると、学校は、次に独自に人をお願いするときにもそのノウハウを蓄積できると思う。学校単位でその調整が可能になれば、環境教育リーダーの人数の足りなさもクリアできると思う。
幼稚園では現在、環境教育が盛んであるが、幼児たちに指導するとなると人数が必要だったり、安全性の確保から余計にコストがかかったりする。環境教育リーダー派遣制度も今後、対象を絞ったり、ジャンルを分けたりと、対象によって派遣する人材を変えていくということが望ましい。リピーターはうれしいが、市からの予算が切れたときに、その学校の環境教育が滞るのであれば、本末転倒である。
- 基本的には教育にはお金や労力のコストがかかる。学校側がどうコーディネートしていくかが大事だ。環境教育リーダーに任せきりにするのではなく、環境の専門家と幼稚園や小学校の専門家である先生が、一緒に作っていくことでコストをある程度削減していかなければ、何人いても限界は出てくると思う。

協議会の議事内容について

- Q 個々の事業ではなく、人、予算、仕組みなど次期指定管理の仕様書に関わらなければ課題が解決できないことについて、この会議で意見交換できるのか。
- A 学校と企業をつなぐコーディネートも、環境教育リーダー派遣制度の主催者とリーダーをつなぐコーディネートも、人員的に相応の人工が必要である。協議会の中で、ウエイトを置くべきことについて議論をいただきたい。

- ウ 環境教育・学習の推進業務
- エ 普及啓発企画業務
- オ 札幌市環境プラザ運営協議会運営業務
- カ その他の業務

指導者向け事業について

- Q 学校で自立して環境教育をする方向では、インタープリターズキャンプや学校の先生向けの研修があったので、こういうことにもっと力をいれるとその方向に向かっていくと思う。

- A 自然のことを伝える方たちに対する学びの機会を、連携しながら相談できる場を作ることが効果的だと思う。

目的の設定と事業評価について

- Q 学校への出前授業であれば、学校の先生が何を考えて、どういう仕組みであればいろいろな方と手をつないで、環境プラザのスタッフがコーディネートをしてやっていけるかということが課題だと思う。
- 親子でまるごとさけ体験も、根底には施設間連携とか団体間連携をやっていく場として設定されていると思う。それらの施設に事業を渡していくことを目標とされるとよいと思う。
- A 今年度はコーディネート事業の強化を大きな柱としているので、事業の中でさまざまな団体と連携してきた。野あそびようちえんでは、自分たちでできるようになり、次のステップとして子育てサロンを実施している児童会館に自然体験活動を広げていくとより大きな動きになると考え、そのつながりを作っていくことをねらいとした。また、野あそびようちえんに児童会館職員を研修という形で入れたことも、今後の展開の布石として実施した。
- 平成30年からの計画で「効果測定の工夫」が掲げられているが、「この事業を実施した成果や実施する意義」を資料に残していくことが大事だと思う。そうすることによって、何が大きかが分かってくると思う。

利用者数増と環境プラザの役割について

- Q 利用者数4,000人増という目標と、環境プラザに期待するもの、施設の役割との関連はどのように考えているのか？
- A(札幌市) 平成27年度から平成31年度の5年間の上位計画である札幌市まちづくり戦略ビジョン、その中期実施計画となるアクションプラン2015に掲載できたことで、展示更新の予算が確保できた。その際、環境プラザの先進性を持ちながら、情報発信力を強化する事業として認められたものの、成果指標を設ける必要があるため、67,000人の集客から、アクションプランが終わる平成31年度に71,000人、4,000人増という目標を掲げたところである。
- いろいろ議論があった中で来館者の指標というのは果たして妥当な指標なのだろうか。来館者という指標は非常にシンプルであるが、人と人とのつながりを作ることが活動目標にあるならば、もう少し精査された数値目標の設定も可能ではないだろうか。展示計画についても、つながりというメインテーマをどうリンクさせていくかという議論につながっていくのではないか。
- Q 4,000人増にならなければ予算上維持もむずかしいのか？
- A(札幌市) 4,000人増の目標はアクションプランとして公表されており、平成31年度に評価されると思う。その時に平成32年度からの計画策定時に、次の指標を検討しながら、環境プラザの事業をアピールしていくことになる。

- 非常に可能性があり、意味のあることを実施していると思うが、そこに4,000人という人数をあわせて実施すると潰れてしまうのではないかと心配である。
- A 子どもたちが変わっていく、市民の方たちが具体的な活動を始めていくということを目標に運営しているので、整理しながら対応できる方法を考えたい。

(2) 展示更新について: 札幌市より展示更新資料の説明を行った。

- ・展示更新の趣旨と予定
- ・改善ポイントのアンケート

- Q 展示更新のコンセプトがわからない。どのような方の意見を聞いてこの素案をつくったのか。背景やどういうコンセプトでこの展示をするかが読み取れなくて何とも申しあげられない。
- A(札幌市) 原案は札幌市で作成し、次に意見を聞くという順番なので、この中身についてはすべて札幌市の責任である。アンケート中の個別の提案項目に対する評価が難しければ、自由記載等にご記入いただいたのでも結構である。
- Q ハウススタジオのときは、結果はどうあれ市民がいろいろと話をする機会を持てたと思うが、今回はどうなのか？
- ハウススタジオ更新のワークショップを実施したときも、ハードに注力すると使い勝手が悪く自分たちがやろうとしてもアップデートしにくい。あるいは、新しい情報があると、書き換え対応ができるものになると良いというアイデアが印象的だった。
- Q 平成26年度から30年度の年次ごとの目標があったが、それに合致した展示になる可能性があるのか。その方向性になっていくのかも必要になる。どういったプロセスを経て最終的にこの展示は決定していくのか。
- A(札幌市) 今年度は計画を作り、来年度はその計画に基づいて実施設計を行い、11月か12月くらいの時期に施工するというスケジュールイメージである。
- 東京の全国地球温暖化防止活動推進センター「ストップおんだん館」(2004年7月30日開館、2010年3月31日閉館)や東京ガスのガスの科学館「がすてなーに」のように、情報を入れかえやすい枠やスペースをつくることをハードとしてしっかりする。いろいろな団体のものを置いたり、体験したりしやすいようなつくりにも施設内の展示更新だと思う。ソフトを活かす形のハードを検討されることが必要だと思う。
- 人材育成につながる学習の場として、必ずしもプロではなくて、いろいろなワークショップに参加された方が成果発表の場として、学びの場としての可能性もあると感じた。